

2003年号

青峰同窓会 会報



目次

- | | | | |
|-------------------|----|--------------------------------|----|
| 1、会長挨拶 | 2 | 5.3 電気（電気電子）工学科の近況 | 11 |
| 2、校長挨拶 | 2 | 5.4 電子情報工学科の近況 | 11 |
| 3、同窓生からの便り | 3 | 5.5 生物応用科学科の近況 | 12 |
| 2.1 マレーシアからこんにちは | 3 | 5.6 材料工学科の近況 | 13 |
| 2.2 米国で働くことになりました | 4 | 6、大学・高専の「独立行政法人化」が迫る | 14 |
| 4、退官教職員 | 4 | 7、最近の技術者教育の動向と鈴鹿高専のJABEEへの取り組み | 15 |
| 5、学科近況 | 9 | 8、会計報告 | 16 |
| 5.1 一般科目の近況 | 9 | 9、編集後記 | 16 |
| 5.2 機械工学科の近況 | 10 | | |

会長挨拶

青峰同窓会会長 古手川 智 (42C卒)

今年は冷夏に続き、9月に入り残暑の厳しい年となりました。同窓会の皆様におかれましては、お変わり無くご健勝のことと存じます。昨年は母校40周年記念事業が行われ、同窓会役員一同かなり多忙でありましたが、今年は何となく落ち着いた雰囲気です。

今年3月に笠井幸郎先生が退官されました。昭和37年の開校年に新任で着任されて以来鈴鹿高専の発展に尽くされ、まさに母校の歴史そのものといえる先生でありました。恩師が母校に居られ、訪れた時にはいつもお会いできる環境は卒業生にとって大変にうれしいことであり

ますが、古い卒業生にとってその機会が失われていくのは残念なことであります。卒業生と母校との相互関係を厚い状態で維持していくことも同窓会の役割と感ずる昨今であります。

今年秋に入って株価が1万円を超えて、景気回復への期待が高まっております。現実に明るさも見えてきたと報道されていますが、まだまだ厳しい状況が続きます。

同窓会会員の皆様のご健康とご活躍をお祈りしてご挨拶とします。

校長挨拶

校長 中根 孝司



鈴鹿高専の卒業生の皆さん、お元気でご活躍のこととお喜び申し上げます。

この度、勝山正嗣校長の後任として10月1日付けで本校に着任致しました中根孝司です。どうぞよろしくお願い致します。

さて、本校は、尚武勉学の校風と基礎理論・実技を重んじる知・徳・体の全人教育により高度の科学技術と豊かな教養、健全な技術者精神を身につけた実践的な技術者の養成を目指し、昭和37年4月に創設され、本年で41年目を迎えました。

卒業生約5,500名の方々には、国の内外を問わず、多くの分野で第一線の技術者や研究者としてご活躍の段、誠に慶賀にたえない次第であります。

また、今日の厳しい経済雇用情勢下にあります、本校の学生は、同窓会の皆様が築き上げられました伝統と実績のおかげをもちまして、希望者全員が就職しておりますこと、誠にありがたく思っております。

最近の急激な社会経済環境の変化に対応するためには、国際的に活躍できる実践的技術者の養成が急務となっております。本校は、本年4月、日本技術者教育認定機構

(JABEE)の技術者教育プログラムの認定申請を行っております。今後は、これを契機として、全学年を通して英語教育にも更に力を入れ、グローバルな視点から物事を捉えることができる技術者を養成していかなければならないと考えております。

本校卒業後の学生の進路につきましては、進学50%、就職50%の割合となっており、進学の場合には、大学への3年次編入または専攻科への進学、さらには大学院への進学が多くなっております。

就職におきましても、求人倍率が9ないし10と高倍率となっており、これは、本校を卒業された諸先輩方の長年のご努力による結果であると思っております。重ねて感謝申し上げます。

最後に、既にご案内のように、平成16年度からは独立行政法人国立高等専門学校機構として55の高専が1つの法人組織となり、本校も1機関となります。私どもは、このような高等教育の構造改革にも的確に対応し、より質の高い教育を提供していく所存でありますので、卒業生の皆様におかれましては、引き続き本校をご支援くださいますようよろしくお願い申し上げます。

「マレーシアからこんにちは」

内田 賀久 (47E卒)

私は、47年に電気工学科を卒業して早31年が、過ぎたこと改めて時の経つ速さを実感しています。

学校卒業直前まで特に決めていなかった就職先を当時の杉野先生がおまへは、松下電器にどうだと紹介していただき、やっと就職先が決まったと記憶しています。会社に入ってから、人事の人にあまり細かい設計とかの仕事はやりたくない、ロボットとかの仕事をしたいとお願いしたら、今回は、希望と反対の所へ配属するのが、方針だといわれ無理矢理テレビの設計部門に配属となりました。仕事は、海外向けのTVの設計ということでしたが、学校で習ったことは、実際の現場では何も役に立たず、全て白紙で基礎勉強から始めるという状態でした。数年後杉野先生にお会いする機会があり、その時学校での勉強は、会社では通用しなかったと申し上げたら、先生からは、「それは当然だ。ただ学校では、新しいことにどのように取り組んでいくか、どうやって勉強していくかというやり方は、学んだはずだ。新しいことに正面から向かって進んでいけ。」といわれたことが、その後強烈に残っています。

会社に入って15年後、ドイツで新しいプロジェクトが、始まり約2年間、クロナッハというニュールンベルグから車で約40分の田舎町で、生活をしました。そこでは、ドイツ人の論理的な考え方、一方では、個人の生活での家族へのいたわりをまじかに体験することが出来、今でも懐かしく出来ればもう一度行きたいと思っています。その後TVの価格競争が、一段と厳しくなり生産地を海外で、単に工場だけでなく開発から物作りまで全て海外に移転するという事となり、そのプロジェクトを日本で推進していましたが、R&Dの移転の中で、1999年の12月にマレーシアへ私も転勤することとなり以来既に3年と10ヶ月が過ぎようとしています。

マレーシアは、多民族国家といわれ人口2300万人、70%がマレー人、25%が中国人、残り5%がインド人で構成されています。当然当社のR&Dも3民族の技術者で構成されており、其々のメリット、又問題点が共存しています。こちらに来て特に感じるのは、やはり技術者は、新しいことに常に挑戦していく姿勢が大事だと強く実感しています。これは、万国共通なんだなと。

海外生活を通じて一番残念なことは、単身生活です。家族の学校の問題を考えると一緒に暮らすことは出来ず、やむなく離れた生活をしています。家族あつての会社生活といわれますが、せめて電話は週3回、日本へは出来れば月一回帰ろうと努力しています。これは、目標倒れとなっています。

人生一回きり、遣り直しはきかないと良く言われますが、自分の人生、自分の努力と周りの人たちとの協力で、悔いの無い人生を、送りたいと思っている今日このごろです。

未だ当分マレーシアに居りますので、是非こちらに来られる場合は、ご連絡下さい。大歓迎いたします。それではジュンパラギ(さようなら)



ブルーモスクというイスラム教の寺院。
東洋一大きいといわれている。

「米国で働くことになりました」

渡辺 浩也 (57C卒)

「米国の会社で働くことになりました」と人に打ち明けたときに、まず聞かれるのは、

なんでまた きっかけは どんな会社 なのです。話す側も相手の立場等により、いろいろ強弱をつけたりもします。でも主な答えは、

米国で働くことが夢だったから

かつての同僚(米人)が今の会社に転職していて彼から誘いがあった。

ヨーロッパに本社があるアメリカの会社と答えます。

一通りこちらの話が落ち着くと、大体皆さん同じ反応が帰ってきます。『大変だろうががんばって下さい。私には、できませんが』と。でも米国で働くのは、皆さんが思っているほど大変でも苦労でもありません。人間単純なもので慣れてしまえば苦労でもなくなります。後に思えば、その苦労でさえ気持ちよく思えるものです。米人ばかりの会社といっても仕事の進め方、管理等は、日本と変わりません。ただ会話が英語というだけです。(その英語が心配? 実は、私恥ずかしながら学校時代に英語で「優」は、一度も取ったことありません) 心配しなく

ても入社後でも十分です。ただひとついえるのは、英語、米人(外人)に対して拒否反応を示してはいけません。そうしてしまうと色々なチャンスが消えていってしまいます。今からでも外国人の友達をたくさん作りましょう。

同窓生の皆さんもこれからは、ますますグローバルな活躍をされ、中には私のように日本を飛び出すかたもたくさんいると思います(もうすでにたくさんいるのでしょうか)もし何か情報が必要なときは、いつでも聞いてください。待ってます。



アパートの玄関

■14年度退官職員(「鈴風」より転載)

鈴鹿高専の永劫なる輝きを

前校長 勝山 正嗣



この度、平成15年9月30日を以て校長の職を退任いたしました。突然の退任のため学生や保護者、同窓会の皆さんにきちっとした挨拶をする機会がなく誠に申し訳ありません。この紙面を借りまして深くお詫び申し上げます。

月日の経つのは早いもので、日々爽やかに元気な学生諸君に接し、はや5年3ヶ月が過ぎ、この間人類は21世紀を迎え、環境、少子化、グローバル化、等に対応した新世紀に求められる新たな社会経済システムの構築の為の改革が進められ、まさに激動の時期でありました。

教育を取り巻く環境も例外でなく社会の急激な変革に

対応し、世界に通用する人材育成と研究の推進を図るため、様々な施策が展開されてきました。鈴鹿高専においても教育改革の潮流の中で独立行政法人国立高等専門学校機構への移行、国際水準の技術者教育であることを実証する為のJ A B E E(日本技術者教育認定機構)審査の受審等に対応しその具現化、実践のための準備を進めて参りましたが、その成果をみないまま退任することになり誠に遺憾であり、心苦しく思っています。新体制のもとで必ずや実を結ぶものと確信しております。

在校生諸君も将来の産業社会を支える選ばれた学生であることに自信と誇りを持って知識・技術の修得に精励

し、健全な心身と信望の厚い人間性を保持した、生涯に亘って継続的に価値創造できる専門的職業人として大成され、我が国や国際社会で活躍されますことを願っています。

我が国が科学技術創造立国として発展し豊かな社会を実現する為には、その機軸となる地球の未来に責任を持ち高い専門性や創造性、感性と広い視野、豊かな国際感覚を備えた、活力ある人材の育成が鍵であり、それを担う高専の技術者教育の使命は益々重要であります。

また高専が地域に根ざした高度の知識とスキルを持つ高等教育機関として地域社会が直面する諸問題に真摯に取り組み、ものの価値に加えてソフトサービス等の無形価値さらには科学技術等に関する知的発信基地としての

役割を果たされ、そしてグローバルに活躍する特色ある技術者の育成と地域社会や我が国のさらなる発展に貢献されますようご尽力されることを願っています。

校長在任中に賜った、保護者をはじめ、同窓会、行政機関市民の皆さん企業の方々の、ご支援ご協力、並びにご理解と温かい励ましをいただきました教職員に心から感謝し、厚く御礼を申し上げます。

鈴鹿高専がさらなる充実・発展を図られ永劫に輝く高専であることを心から祈念するとともに、皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げ、今後とも変わらぬご指導とご交誼を賜りますようお願い申し上げます退任の挨拶にかえさせていただきます。

お世話になりました。

鈴鹿高専を去るに当たって

一般科目国語 小谷 信行



私が鈴鹿高専に奉職したのは、創立十周年の年でした。国家公務員になったわけですが、私自身にはそのような意識がまったくなく、あくまでも鈴鹿高専の職員に採用されたつもりで、職務に専念してまいりました。この気持ちは、現在に至るまで少しも変わっておりません。

本校での前半は教育行政に従事し、後半は教育研究に精励いたしました。その中で感じたことは、当たり前のことかも知れませんが、自由放任の教育を一方の極とし、管理教育をもう一方の極とすると、理想の教育というも

のは、両者の中間より少し管理教育側に寄ったところにあるのではないかということです。

私にとって、何よりも幸せであったのは、生涯の目標である近世文学の研究にいそむための、時間と環境を与えられたことです。なかでも近世子供絵本の研究は、本校で培った研究を基礎として、今後とも継続していくつもりであります。そして、本校を去るのが奇しくも創立四十周年にあたり、これもなにかの因縁ではないかと思っております。

三十年間、本当にありがとうございました。

教師生活を顧みて

一般科目化学 中村 正夫



昭和40年4月に鈴鹿高専にお世話になることになり、入学式の壇上で学生諸君に「君達の兄貴のようなつもりで頑張りたい」と話したことを思い出す。そして多くの教職員の方々との出会い、指導を受けたり、一緒に、あるいは助けられて、その時々仕事を一生懸命やってきて、気がつくや38年が過ぎ去った。担任をした学生、サッカー部の学生、卒研生など多くの学生と接し、時代と共に学生の気質の変化

を感じながらもその若いエネルギーを少なからず貰いながらの日々であった。今もお付き合いの続いている卒業生も多く、教師冥利に尽きます。

思えばサッカー部の顧問、部長になって約30年、ズブの素人で(今でもそうかも)初めは入った、入れられたと一観客として試合を見ることしかできず、これではダメと本を読み、ビデオを見たりでやっと選手の動き、流れで試合を見るようになった。しかし今でも古いIOBは先生は「行けー」と

言っているだけだったとからかいます。また、寮務主事として平成5年に、当時はまだ全寮制であり、一番多くの学生がいる四寮の改修で、たくさんの学生を、一時通学してもらうために苦労したことを思い出す。同時に寮管理棟、男子用の二つの風呂の改修も終わった。私個人としては昭和62年に工業化学科から一般化学担当として一般科目に移ったことが大きい変化である。

退官後は自分の時間はたっぷりあり、まず健康の為、スポーツは続けよう、あとは晴耕雨読かな、あるいは何か別の趣

味をと思っている。少なくとも昼間から酒を飲みボケがきて「アル中ハイマー」にならぬよう、なんて馬鹿なことを考えながら楽しみにしている。今後、高専をとりまく情勢が大きく変わりJABEEや法人化がクローズアップされる。しかし形が整っても中身は学生諸君にかかっている。「仏作って魂入れず」みたいな事にならぬように学生諸君の頑張りをお願い、今後の鈴鹿高専の発展を期待しエールを送る者の一人である。

計算機とともに

機械工学科 辻 正利



36年前の学生は、授業で“計算尺”を用いて有効数字3桁の計算し、実験や研究では数学関数値を“丸善7桁Mathematical Tables”から読み取って“Tiger計算機”をチン、ガチ、ガリガリとひたすら手回していた。当時は誰もがそうであった。その頃東大大型計算機センターに電子計算機HITAC 5020が設置されていて、研究に利用したい一心で“森口繁一著JIS FORTRAN入門”を学んだ。昭和46年名大大型計算機センターにFACOM230-60(cpu160KW)が設置されたのを機に、program(穿孔したcard)を郵送して計算を依頼した。急ぐ時はcardが詰った重い鞆を持って名大へ通った。昭和47年本

校にFACOM230/25(cpu24KB)が電子計算機室に設置され情報処理の授業が始まり、私も有限要素法を開講したり卒業研究に利用させてもらった。今やパソコン全盛期となり校内LAN開設、名大ATMネットワークが構築され、自室からftpしTSSにて名大ccの汎用機gpcs GP7000Fm900(cpu2GB,連続運転)を利用しており、大容量・複雑な計算が手軽にできるようになったことは、まさに隔世の感である。

最後に、教職員の皆様の御指導と御援助、卒業生の激励などのお陰でここに辿り着くことができましたことは誠に有り難く感謝申し上げます。皆様のご健勝と鈴鹿高専のご発展をお祈り致します。

本物を

電気工学科 立木 滋也



本校にお世話になって早、三十九年。光陰矢の如しです。いろいろなことがありましたが、それでも大過なく過ごしてこられたのも関係教職員の皆様方のお陰でございます。

さて、私には美術品鑑賞という趣味が学生時代よりついてまわっておりますが、これによっても随分、ストレスから開放されました。素晴らしい美術品に接すると力が湧いてくる、安らぎや希望が与えられるといわれています。一方、偽物は精神衛生上よくありません。いつどこでも出来る限り本物に接したいものと思っても、安いからとか稀少品だからといった不純要因が混ざってくると、必ず後味が悪くなり

ます。これは、自らの心に邪念があるからで、責任は自分自身なのです。無心になって見れる自分の眼が本物の自分の眼であるとすれば、その本物の自分を磨く必要があるものと最近感じます。そして、さらにこの美術品の枠を越えた環境に対してもこの理が言及できるものではないかと思うようになってきました。

定年後は晴耕雨読のことわざどおりの計画を立てていますが、時には本物の自分の発掘にも力を注ぎたいものと思っております。最後に皆様方の御健康と御多幸を衷心より祈り申し上げます。

昭和40年4月に鈴鹿

電子情報工学科 奥井 重彦



1976年（昭和51年）に鈴鹿高専に採用されて以来、16年間で電気工学科、残りの11年間は電子情報工学科に勤務し、このたび退官することになりました。着任早々、電気工学科三年生の担任を命ぜられ、当時は一、二年生が全寮制で、授業時間も行事も多く、毎日、夢中で過ごしたことを思い出します。今日まで、ご指導いただいた教職員の皆さまに心からお礼申し上げます。

コンピュータの急速な発達とともに、高度情報化社会を担う技術者の養成が急務となり、1989年（平成元年）本校に電子情報工学科が設置されました。四階建ての学科棟は二年後に完成しましたが、その間、学生実験室、準備室、教官室のレイアウト、備品購入計画など、小林政和先生、桑原裕史先生、伊藤八十四先生とともに、連

日準備に過ごしました。学年進行に伴う教官の採用に当たっては、電子情報工学の専門教育を受け、学生の教育にも研究にも熱意のある方に来ていただきたいと願い、大学に何度も足を運びました。幸い、時にかなって、次々と最適のスタッフが与えられたことを感謝しています。聖書のことばに、「わが子よ。すぐれた知性と思慮とをよく見張り、これらを見失うな。それらは、あなたのたましいのいのちとなり、あなたの首の麗しさとなる。こうして、あなたは安らかに自分の道を歩み、あなたの足はつまずかない。」（箴言3章）とあります。技術がますます高度化する中であって、若い頭脳をもった学生のみなさんが、自分に与えられている能力を大切に、さらに生かし、成長していってくれることを心から願っています。

40年の回顧

生物応用化学科 笠井 幸郎



私は昭和37年6月に創設まもない鈴鹿高専に奉職し、40年と10ヶ月勤務して、この度定年退職することになりました。私の人生の「おいしい」部分を殆ど鈴鹿高専で過ごしたと言っても過言ではないと思っています。

15才から20才という年齢の学生と共に過ごした40年余、今振り返ってみると感慨深く、それは充実した時間でした。学生諸君との接触もある年代までは弟や妹だったのが、いつの頃からか息子や娘になっていました。その40年は長くも短くも感じられるのですが、その間には色々なことが有りました。それらが走馬燈のように頭のなかを駆け巡って行きます。仮校舎での頃のこと、新校舎の一部ができたけれど廻りが整備されておらず長靴での通勤を強いられた頃のこと等がつい先日のことのように思い出されます。

授業を担当するようになって間もなくの頃でした。本校にも学園紛争が生じ処分者を出すことになってしまいました。その処分撤回を求める一部の学生が授業中の全

学生に対して「みんなは彼らを見殺しにしているのか」という訴えに、どのクラスからともなく教室から学生が次々と青空広場へ飛び出して行った時のこと、その緊迫した雰囲気は今も忘れることができません。

また学生主事を仰せ付かって間もない頃、オートバイの二人乗りで事故を起こし、同時に二人の学生を失いました。このショックは大きく寝れない夜が続いた。この先だれもがこのような思いをしなくてもいいように、交通安全テキストの編集とか交通講話、交通安全講習会等考えられることを色々に行いました。この時の主事補の先生には色々負担をおかけしましたが、その後本校で交通死亡事故が起こらなくなりました。教官の熱意が学生の意識を変えることができるという気分を味わうことができた一幕でした。

ともあれ40年余大過なく過ごすことができたのは優秀な学生に囲まれ、歴代の校長先生を始め先輩教官、同僚教官および事務官のご指導とご鞭撻に負うところだと思っています。この期に改めてお礼を申し上げる次第です。

今教育界を取り巻く状況は非常に厳しく大変な時代があります。こうした時期に逃げ出すように退職するのは何かと気が引けますが、これも巡り合わせですとお許しいただきたい。ある方からいい時期に退職されますねと言われましたが、心のなかではそうかも知れないと思

う自分も居ります。

鈴鹿高専に相変らず優秀な学生が集い、特色ある技術者教育が実践され高等教育機関として増々充実発展されることを祈って止みません。

日々に新たに

文部科学事務官 山崎 治憲



見馴れた風景とも、あと数ヶ月でお別れです。長いといえば長く・・・短いといえば短い学校生活だったと思います。ここ数年は世の中の移り変わりが激しいせいか特にそう感じられました。

今振り返ってみると随分といろいろな出会いがあったと思います。その中には心暖まるような出会いもありました。

すべてがコンピューター化され、人間までがロボット化される方向に時代は動いています。と同時に、誰もが利益追求という目的のもとに、人間らしい感情を失いつつあるような気すらします。こうした昨今では、とても経験できない良き出会いを持てたことは私にとって幸せでした。

そしてこれからは「日々に新たに」の覚悟で、次の人生を自分なりにつくり出していこうと思っています。

定年退官を迎えて

文部科学事務官 中林 壽生



私は、鈴鹿で生まれ育ったが、特にこの地は思い出が深い。それは小学生の時に前のNTT陸上競技場に数回来たことがあるからである。その当時は、すすきが背の高さ以上に生い茂った中に変わった建物が沢山あった。そのひとつが正門前の倉庫である。ここは一期生が教室として使用していたと聞いた。また現在の高専敷地内には蒲鉾型の建物があったように記憶している。その日は、朝早く家を出、弁当と水筒を持ち遠足をかねた競技会のようにであった。行事が終わり帰る時に蒲鉾型の建物近くで少し遊び、また休みながらの帰り道であり、家に着く頃は暗くなっていたが楽しい1日であったことが思い出される。

昭和46年に会計課に配属され、その後学生課、庶務課と配置換えになった。中でも学生課には18年間在職し、たくさんの学生との出会いがあった。

本校に奉職した当時、12月にもなると各教室棟は何日も朝まで電気がついて学生の声が聞こえていたことがあ

った。また合宿研修、遠足、体育大会、高専祭等学生と共にすごした日々、それに卒業式が終わると学生課に来て職員に言葉をかけてくれる学生、中には学半ばで自分の進路についての相談を受けたこと、留学生が自国を案内してくれたこと等が思い出として忘れることなく残っている。また、創立40周年記念式典の日には、多くの卒業生に声をかけられ、学生時代の思い出に花を咲かせたり近況を聞いたりして、ひとときを過ごしたことも、懐かしく思い出される。不景気と言われ学校を卒業しても就職が難しい今日でも、本校は年内には卒業生の大半が進路を確定、卒業までには全員が決定するということが素晴らしいことです。このことは卒業生がその職場において自分の実力を発揮し、貢献しているからに他ならないからであろう。

こうした本校に長年奉職できたことをうれしく思っております。また、この間教職員皆様のご支援ご指導の賜物と感謝しております。最後に鈴鹿高専のますますの発展と皆様の健康を祈念しております。



■各学科の近況報告

一般科目

外国語教室 出口 芳孝 (48E卒)

前回お知らせしましたように、化学の中村先生、国語の小谷先生が定年退官され、その跡を受けて、山崎先生が生物化学科から移籍、石谷先生が新規採用されました。

さて、今年の目玉はなんといっても高専大会での活躍です。全国大会で団体優勝した剣道(細野先生)、バスケット男女(川本先生)、テニス(出口)、同3位のソフトテニス(三上先生)、Best 8のサッカー(宮崎先生)、バレーボール(林先生)、個人戦2位の陸上(船越先生)柔道(仲本先生)、3位の卓球(中井先生)、と、全て一般科目教官が部長をつとめています。体育・武道はさもありなんというところですが、手前味噌ながら、外国語教室も学生主事の松林先生を含めて男性教官全員が出払ってしまうという盛況振りでした。

更に大きな動きとしては、この号の各所で触れられているように、独立行政法人化、とJABEEの受審を控えて、組織や教育方式において様々な改善がはかられているこ

とが挙げられます。これらの改革は「教育機関としてのサービスの保証」を目指すものですが、時としてアウトプットの最低品質保証として語られてしまいます。人間に対して「品質」という言葉を使うこと自体にためらいがありますし、「質」の定義が外からはかりやすい教科の点数や、資格の級のようなものだけであっていいのかという疑問を感じつつ、まず数値化できる部分だけでも自分たちに縛りをかけ、独善的になりがちな教育の場を少しでも改善して、よりよい学校に変わっていこうと頑張っています。

そして、個人的な考えですが、一般科目の役割は、鈴鹿高専の伝統である知徳体の人間教育、もっと簡単に言えば、点数になりにくい人間として大事な部分に関わり続けることだと思いますし、これが私一人の思いではないことが全国高専大会での一般教官のがんばりぶりに表れているのだと思います。

機械工学科

藤松 孝裕 (62M卒)

厳しい社会情勢である近年、機械工学科の卒業生の皆様におかれましては、ますますご活躍のこととお喜び申し上げます。本校でもJABEE 審査、独立行政法人化と、時代の流れについていくのが大変な毎日を送っております。さて、本年度も機械工学科の近況を報告せよとのことなので、例年と同じように簡単に紹介させていただきます。

はじめに、機械工学科での人事異動ですが、長年にわたり本学科のためにご尽力いただきました辻正利教授が平成15年3月に定年退官されました。辻教授は長年にわたり学科主任を勤められ、本学科の教育活動に多大な貢献をされており、辻教授の退官は、本学科のみならず全学職員からも惜まれております。なお、本年度に関しましては、非常勤講師として、毎週木曜に来校されています。後任としては、機械設計関連を専攻している仲野

雄一教授(前 湘南工科大学教授)が本年4月より教鞭をとられており、機械工学科の守備範囲がさらに広がったように思います。また、本年度(平成16年3月)には、西谷正教授が退官されます。この際にお会いしておきたい同窓生の皆様は、本年度中に来校されることをお勧めいたします。

現在在職しているスタッフおよび主な研究テーマは下表に示すとおりであり、その他、澤辺昭廣技官、谷川義之技官の総勢13名で機械工学科での学生指導や研究活動に取り組んでおります。また、本校には、高価な研究設備も設置されていますので、卒業生の皆様におかれましては、会社での問題点等が本校に設置されている研究設備を使って解決できるようであれば、気兼ねなく一声おかけください。また、お近くにお越しの際には是非一度お立ち寄りください。

実験室	教官名	各実験室での主な研究テーマ
精密工学	富岡 巧	4足歩行ロボットの歩容について
	白井 達也	柔軟関節ロボットの研究開発
加工システム	大井 司郎	高精密切削ホイールの製作に関する研究
	打田 元美	二物体間の接触圧力分布測定法の開発
材料力学	西谷 正	高分子材料のクリープ変形に関する研究
	末次 正寛	材料の衝撃破壊挙動の直接観察・超音波の工学的利用
機械設計	仲野 雄一	接着構造体の強度設計に関する研究
流体工学	近藤 邦和	超音波速度分布計による自由噴流に関する研究
熱工学	岡田 修	気液二相流に関する研究
	藤松 孝裕	単一液滴と静止液面との衝突による気液界面の変形に関する研究
振動工学	民秋 実	GFRP平板の多軸荷重下における疲労損傷に関する研究



電気工学科

近藤 一之 (52 E 卒)

題名に「電気工学科」と書いてしまいましたが、実は平成15年4月から「電気電子工学科」と学科名を変更しました。多分これが一番大きなニュースではないかと思えます。学科名称変更により、受験希望の中学生の皆さんに対する履修内容の説明が容易になりました。今までは電気工学科といえば、中学生にとっては強電関係のみと思ってしまい勝ちでしたが、これからは弱電関係も勉強するのだということが言わずもがなに分かります。また、卒業生を採用していただく企業の皆様にも今までと変わらず強電関係から弱電関係にも広く声をかけていただけないかと期待をしています。在学している学生は2年生以上は「電気工学科」ですので、今しばらくこの名もよろしく願いいたします。

平成15年3月には、電気工学科に39年の長きに亘って

在職された立木先生が退官されました。先生はその朗らかなお人柄ゆえに在校生はもちろんのこと、卒業生からも愛される存在であったことは言うまでもありません。立木先生の後任として、熊本電波高専から鈴木昭二先生が平成15年4月に着任されています。先生の活力あふれる専門分野への取り組みは早くも卒業研究、創造工学の学生を巻き込んでおり、今後電気電子工学科をより一層活発にすることであろうと思われまます。

電気電子工学科主任として、北村先生が平成15年4月よりその任に当たっておられます。奥田先生が平成15年5月より内地研究員として10ヶ月間出張しておられます。

卒業生の皆様、今後とも電気工学科同様電気電子工学科をよろしく願いいたします。

電子情報工学科

長嶋 孝好 (48 E 卒)

卒業生の皆さまには、お元気でご活躍のことと思えます。学生の就職や学外実習等では、種々お世話になり、ありがとうございます。

さて、学科の近況をお知らせしたいと思います。まず、奥井重彦先生がこの3月末をもって退官されました。先生には「応用数学」や「情報伝送工学」等でお世話になりました。退官後は、非常勤講師として「情報伝送工学」(5年生)の授業を担当していただいております。また、船戸康幸先生が、平成16年3月末をもってご退官の予定です。学科主任については、現在、船戸先生に代わって桑原裕史先生が勤めてみえます。

着任された先生をご紹介します。井瀬 潔先生は、企業にお勤めの後、この4月より電子情報工学科の教授として勤務されています。先生のご専門は、半導体集積回路における信頼性解析等、電磁波導波路解析です。先生は、5年生の担任を、また「電気回路論」(3・4年)、「基礎制御工学」(4年)等の授業を担当されています。

また、吉川英機先生は、この3月まで在外研究員としてハワイ大学にて研究生活を送られました。今年度、講師に昇任され、4年生の担任としても、ご経験を活かしつつ教育・研究に取り組んでみえます。

次に、施設設備の変化をお知らせします。まず、この3月に、情報処理実験室の計算機システムが更新され、OSはWindows95 + FreeBSDからWindowsXP + Linuxとなりました。CPU、メモリ、HD等において容量や性能が大幅にアップし、快適に実験実習に取り組めるようになりました。また、この夏に、第1基礎実験室にエアコンが整備され、こちらも涼しく快適な環境となりました。(各クラスルームには、既に数年前よりエアコンが設備されています)

学科のホームページ (<http://www.suzuka-ct.ac.jp/info/>) が充実しました。「卒業生の皆さまへ」などお読みいただければ幸いです。近くにお越しの折、あるいは電子メール等で、学校・学科・先生方にアクセス下さり、近況・要望・苦情?等、お聞かせいただければ幸いです。

生物応用化学科

下野 晃 (58C 卒)

鈴鹿高専は昨年度創立40周年を向かえ、また、来年度の独立法人化に向かって激動の時期を迎えています。卒業生の皆様も出口の見えない不況の中にあっても元気にご活躍のことと存じます。人事面では、永年、本校の発展にご尽力を賜っていましたが笠井先生、中村先生が定年退官され、寂しい限りですが中山、淀谷両先生を迎え“学生のために”を合言葉にスタッフ一同、一丸となってこの時代を乗り越えてゆけるよう努力してまいります。以下の先生方から近況・皆様へのメッセージをいただきましたので紹介させていただきます。

高橋：卒業生の皆さん元気に活躍していますか。私は、平成16年3月に定年を迎えます。定年後は、新しい目標に向かって楽しい人生を送りたいと思っています。

坂西：卒業予定者の就職戦線は個々人を慎重に観るといふ時代に、また学科内も改善・変革の時代となりました。

杉山：大はカメラマン誤射のイラク米軍から、小は長崎の中学生まで、西は熱波で死者続出のフランスから、東は冷夏で不作のニッポンまで。人と地球のおだやかな環境を守るための技術の開発を。

内藤：工業化学科に着任して7年、古き良き時代は終焉、来年度からは独立法人化されます。外部研究費獲得が可能な研究を中核に学生とともに励んでいます。

岩田：本校の教育が今年初めて、外部の詳細な点検評価を受けます。その準備に忙しい毎日ですが、これまでの教育を見直す良い機会にしたいと思えます。

生貝：今年は、研究に関わる用事が少し増えました。うれしい悲鳴と思ひ、頑張っている次第です。来年も同じようなことが言えるかどうか、多いに心配です。

長原：現在、4年生の担任です。夏休みの学外実習が終わり、そろそろ10月の高専祭の学科展示や化学マジック等の準備が始まったところです。

中山：今年度より本校、生物応用化学科着任しました。これからは、グローバルな視野を持って生きる時代です。“有言実行”で頑張ってください。



材料工学科

南部 智慧 (2H卒)

材料工学科におけるこの一年間の活動内容を皆様にお伝えいたします。今年は材料工学科の先生方が学内の『主』あるいは『長』として活躍され、大変忙しい毎日を送っているように見えました。まず、学科主任の梶野先生です。昨年度から5年生担任との兼務が免除されたのですが、側から見てみるとむしろお忙しくなったのではないのでしょうか。来年度からの独法化にともない、長年溜まり続けた備品の整理や安全衛生管理等、大変な仕事をこなされています。また学生の就職・進学面でも大変苦労され、この不況にもかかわらず夏休みを前にしてほぼ全員の進路が決定いたしました。国枝先生は専攻科応用物質工学専攻主任として、こちらでもまた大変な仕事をこなされています。日本技術者教育認定制度は、工学系大学・高専にとっては早急な対応が求められているものですが、本校でもJABEE検討委員会を設け、様々な対応をはかっております。井上先生はこの重要な委員会委員長として、本校教育プログラムの改善に大変ご努力されております。膨大な資料の作成に加え、教職員の意識改革は困難なものであったと思います。

一方、研究面に注目いたしますと、本校では産学官が連携した研究活動に力を注いでおりますが、その中心となる産学官共同研究推進協議会の委員長として小倉先生が、また同副委員長として江崎先生が就任されております。これにともない、旧情報処理センターを改修して作られた共同研究推進センターのセンター長および副センター長も先生方がそれぞれ努められています。共同研究推進センター内には地域の企業と共同して研究を行うための実験室がありますが、小倉先生、井上先生、江崎先生、兼松先生、和田先生そして筆者の研究テーマが遂行されており、ほぼ9割方のスペースを材料工学科が行う共同研究設備に占有されているのが現状です。また本年度は江崎先生、下古谷先生、和田先生が科学研究費の助

成も受けており、研究面においても先生方の活躍が大いに注目されております。

さらに、学校開放事業においても材料工学科が注目されるべき活躍をした年でもあります。岡部先生を中心とした七宝焼きの実演は学外で開催されるイベント等にも招待され、地域の皆様にご大歓迎されております。また小林先生を中心として夏休みに開催した材料工学科のオープンカレッジ(公開講座)では、定員20名のところを41名もの応募がありました。急遽予定を変更して応募者全員の受講を受け入れ、先生方は嬉しい悲鳴を上げながら準備をしておりました。兼松先生は興味深い科学教育の手法を海外から取り入れ、本校だけでなく周辺の高等学校に出向いて授業をするなど、最近注目の出前授業の先駆者として活躍されております。また、その発案者でもあるダナ・バリー先生をアメリカからご招待して講演の場を提供するなど、国際的な活動は目を見張るものがあります。

このように、材料工学科の先生方は教育・研究・地域貢献など上手く業務を分担し、それぞれの得意分野を生かして活躍されております。最後に筆者が管理をしております材料工学科ホームページの紹介をさせていただきます。この夏、材料工学科のホームページを一新いたしました。URLは <http://www.suzuka-ct.ac.jp/mse> です。できるだけ学科の様子をうかがえるように常に更新を心がけてまいりますので、ぜひご覧ください。また、鈴鹿高専の卒業生による産学連携のネットワーク『鈴鹿高専ヒューマン&テクノロジーネットワーク』のホームページも現在筆者がリニューアル中です。URLは <http://www.suzuka-ct.ac.jp/sangaku/shtn/index.html> です。11月1日に新しいホームページを公開する予定ですので、こちらの方もよろしくお願い申し上げます。

大学・高専の「独立行政法人化」が迫る

副校長 齊藤 正美 (43M卒)

すでに新聞やテレビで報道されているように、国立の大学・高専は平成16年度から新たな法律の下「独立行政法人」として再出発する予定になっています。12校ある高専一期校の一つである鈴鹿高専は昨年創立40周年を迎えてささやかな記念式典と祝賀会を催しましたが、41年という歴史の中でもっとも大きな変化の時代を迎えることとなります。

大学は一校で一法人という形になりますが、高専の場合は全国55校が集まって一つの独立行政法人「国立高等専門学校機構」となり、鈴鹿高専もその中のひとつの学校となります。「機構」は今後とも国の予算（正確には国からの交付金）で運営されるので、あくまでも「国立鈴鹿工業高等専門学校」であり、決して「私立」高専になるわけではありません。学校教育法上は一つ一つの学校として扱われ、またそれぞれの独自性や個性が強くと求められますが、今までに比べると「全国高専連合」的な意味合いがより強くなっていくように思われます。つまり、言葉を恐れずに言えば「国立高専機構・鈴鹿キャンパス」的な雰囲気が出てくるような気がします。この「機構」は、毎年約1万人の卒業生を輩出する「日本一大きな」工科系大学に相当する、つまり東工大クラスの大学4、5校分に匹敵します。三重大学工学部の定員は約400名ですから、その大きさは容易に想像がつくと思います。また創設以来の卒業生の数は全国で30万人を超えています。私達は、私達が考える以上に我が国の産業界に大きな影響を与えているということを再認識する必要があります。

組織形態だけでなく、高専の設置基準そのものも大きく変わりました。「独立行政法人国立高等専門学校機構法」第三条では、「……職業に必要な実践的かつ専門的な知識及び技術を有する創造的な人材を育成するとともに、我が国の高等教育の水準の向上と均衡ある発展を図ることを目的とする」となっています。まず、従来の設置基準の中にあった「中堅技術者、実践的技術者」が消えて「創造的技術者」の育成が高専の目的となりました。次に「高等教育の向上と均衡ある発展を図る」に見られるように、大学とは「別の」高等教育機関、ある

いは異なる手法と思考法に基づく技術者養成機関を志向せよ、という方向性が与えられています。更に第十二条では「……教育研究活動を行うこと……」が業務内容となり、教育のほか研究活動も高専教官の仕事として正式に位置付けられました。これらは文部科学省が新たに出した構想というよりも、むしろ専攻科の存在や高専教育の評価から現状を追認していただいた構想という気がします。

法人化と並ぶ重要な動きとしてJABEE（日本技術者教育認定機構）による大学・高専教育の認定審査があります。多くの高専ではこの審査を受けようとしています。この問題もどちらかという高専に有利に働いているようです。詳述は避けませんが、一言でいえば高専教育（専攻科教育）は国際的に通用する教育システムであることを保証してくれることになるからです。

ずいぶん以前から「専科大学」や「工科大学」構想が出ては消え、消えては出てはいましたが、今回の法人化により「大学」への道はむしろ遠くなったように思われます。何故なら、設置基準では暗に高専教育は大学学部教育に比べて遜色はないというニュアンスを含みながらも、大学とは違う形で技術者教育を行いなさいというニュアンスが強く感じられるからです。また少子化が進行する中、大学のリストラ化さえ言われている時代にこれ以上多くの「大学」は必要ありません。これまでの「専科大学」構想は多分高専教官の自信のなさからきていたように思われますが、この辺で「高専は高専」という考え方をもち、むしろ大学を超えるくらいの気持ちで教育改革に踏み込んでどうかと思う次第です。ふさわしい学校名はその後からついてくるはずで

さて、41年という歴史は長いでしょうか、短いでしょうか。草創期の卒業生が、しかも20歳という若さで卒業した多くの方達がそろそろ定年を迎える年になることを考えれば決して短いとは思われません。その意味で、来年の「独立行政法人化」は高専の一時代の終わりであり、また新たな幕開けであることを強く感じます。

最後に、卒業生の皆さんの活躍と健康を祈念して筆を置かせていただきます。

最近の技術者教育の動向と鈴鹿高専のJABEEへの取り組み

JABEE検討委員長 46H 井上 哲雄

21世紀を迎え科学技術の急速な進歩と経済規模のグローバル化により、工学系高等教育機関に求められる教育内容およびその水準が大きく変わりつつある今、われわれにとってもっとも重要なことは、高専の技術者教育に対する社会の多様な要請を正確に把握し教育プログラムの継続的改善を図ることはもちろんであるが、それと同時にわれわれ教員の意識改革をも着実に進めていくことである。

大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方針について」によると、大学改革について

課題探求能力の育成（教育研究の質の向上）

教育研究システムの弾力化（大学の自立性の確保）

責任ある運営体制の確立（組織運営体制の整備）

大学の社会的責務の履行（大学評価システムの確立）という4つの基本的柱を明確に打ち出し、各大学に競争的原理の導入を行い教職員全員に改革への努力と意識改革を求めている。大学という言葉を高専に置き換え、再度読み直してみると高専が進むべき方向が示されており、われわれ教職員がとるべき道は自ずと明らかになってくる。

また最近の技術者教育に求められるカリキュラムには、学生自身のアイデアを生かした創造性を育む「創造教育プログラム」、PBL(Project Based Learning)などを積極的に導入した課題探求能力を育む「工学教育プログラム」や実践的な「ものづくり教育」などによる多彩な教育を取り入れることであり、従来から行われているような先生が知識を伝授するだけの講義形式による教育は特に技術者教育分野では求められなくなりつつある。

そんな中、産業界の強い要請と行政機関（当時の文部省、通産省、科学技術庁など）の支援を受けて、関係学協会により平成11年11月に日本技術者教育認定機構（以下JABEEと称す）が設立された。その目的を簡単にまとめると「統一の基準により技術者教育プログラムの認定を行い、その国際的同等性を確保する」とことと「技術者教育の質の向上と国際的に通用する技術者の育成を通して社会と産業の発展に寄与する」という2点に絞ることが出来る。JABEEの審査により、われわれの行っている技術者教育プログラムが上記の2項目を満足するか否かに、これからの鈴鹿高専の命運がかかっているといっても過言ではないと言える。

本校では、平成12年4月に教務委員会のもとに専攻科長をヘッドとするJABEE検討WGが設置され、教務主事補の一人としてその委員となった。JABEE設立後間もないこともあ

り、各地で説明会や関連シンポジウムが多く開催され、正確な情報を得るために時間の許す限りそれらに参加するとともに、WGで議論し本校としての対応を話し合ってきた。この年には全国で約20プログラム（大学19、高専1）がJABEEによる認定試行を受けることになった。当時本校ではJABEEという機関の名前さえ浸透していない雰囲気であり、試行を受ける仙台電波高専の取組みに脅威さえ覚えたことを今になって思い出す。年度末に順次開催された試行報告会での情報入手し、検討するに従い本校でも早急にJABEE認定に向けての組織固めをする必要が生じてきた。平成13年に上記JABEE検討WGを発展的解消し、各種委員会と同列のJABEE検討委員会が発足することになり、学校長から初代委員長を拝命することとなった。第1回目の委員会では特に学校長より「15年に正式認定を受けることを目標に」という指示とその考えが述べられ、委員会の議論もその目標に向かって準備を重ねてきた。一部の先生方からは「何でそんなに急いでやるのか？」という意見も時々耳にするが、将来の鈴鹿高専のビジョンを考えてのタイムスケジュールであるので、この会報紙上をお借りして卒業生諸氏のご協力をお願いしたい。

平成14年度には約33プログラム（高専3）のプログラムが認定された。高専のプログラムは大学と異なり、学科4、5年＋専攻科1、2年での4年間の教育プログラムを評価の対象とするので、若干カリキュラムの立て方や考え方が異なるので、高専関係者（2技科大含）だけの試行報告会が開催されている。

いよいよ平成15年度の審査が開始される時期を迎え、どこの大学・高専のいくつの教育プログラムが正式認定を受けるのか（特にどこの高専が）気にかかるころであるが、常にアンテナを高くして正確な情報を入手し、少なくとも本校がその対応に遅れをとらないようにしていくのがJABEE検討委員会としての最大の使命であると考えている。

これからの高等教育は公正中立な第三者機関(JABEE)による評価によってその教育プログラムの質が保証され、しかもそれが一般に公開されることになる。すなわちその結果が、入学者の数や卒業生の就職に直接影響を与えることになるので、常にそれを意識しながら現状に満足することなく、地域社会からますます期待される高専となるために教育改善を進めていかねばならないと考える。

【参考：http://www.jabee.org/】

■ 14年度会計報告

平成14年度 青峰同窓会 会計報告

収入の部

摘要	金額(円)
平成13年度からの繰越金	39,504,964
平成13年度卒業生入会金・終身会費	2,123,000
過去の卒業生入会金	66,000
預金利息	36,468
合計	41,730,432

支出の部

摘要	金額(円)
臨時総会会議費	2,419
会報発行経費	726,360
卒業生名簿発送経費	7,860
電報代費	900
事務費	181,933
寄付金(40周年記念事業)	3,000,000
次年度へ繰越金	37,810,960
合計	41,730,432

■ 15年度会計予算

平成15年度 青峰同窓会 会計予算

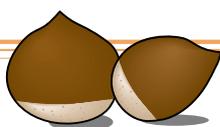
収入の部

摘要	金額(円)
平成14年度からの繰越金	37,810,960
平成14年度卒業生入会金・終身会費(193名)	2,123,000
合計	39,933,960

支出の部

摘要	金額(円)
総会、理事会等の会議費	50,000
会報発行経費	1,000,000
事務費	200,000
次年度(平成16年度)へ繰越金	38,683,960
合計	39,933,960

編集後記



8月の冷夏、9月の残暑、十勝沖地震と異変が続いておりますが、異変は自然界のみでなく人間社会でも色々大きなニュースが途絶えることはありませんね。高専を取りまく状況も日々変化しており、その対応に追われております。その代表が「法人化」と「JABEE」ですが、今回の会報の記事により母校の状況をご理解いただき、ご協力いただければ幸いです。

忙しい世の中で、その忙しさに追われていると本質を見失ってしまうことがあります。時には同窓生・同級生と秋の夜長、時間を忘れ語りあう余裕を持ちたいと思っております。(北村 登 47E卒)

誌名 青峰同窓会会報
発行日 2003年12月
発行 国立鈴鹿工業高等専門学校
青峰同窓会 広報委員会
〒510-0294 鈴鹿市白子町
Tel:0593-86-1031(代)
E-mail:almn@suzuka-ct.ac.jp

ホームページ
<http://www.suzuka-ct.ac.jp/almn/>